８月号営農インフォメーション

水　稲

水管理

①　カドミウム吸収抑制対策・高温対策

出穂前後３週間は湛水管理（浅水）で管理します。日中ならびに夜温が高い日が続き深水になっていると稲体も弱まり、紋枯病も助長されるため降雨の無い期間の深水管理は避けましょう。

晴れた日が続き、降雨のない場合や夜間気温の高い日が続く場合は、高温障害対策のために、朝や夕方などの気温が比較的低い時間帯に入水しましょう。また、この時期の湛水管理はカドミウム吸収抑制対策にもつながっておりますので、忘れずに実施願います。

※玄米に含まれるカドミウム濃度は０．４ｐｐｍ未満と食品衛生法で定められています。

※土壌中のカドミウムは、土壌の水分状態によって存在形態が変化します。土壌が還元状態（湛水し土壌中に酸素が少ない状態）になると硫黄と結合して水に溶けにくい硫化カドミウム（CdS）になり、作物に吸われにくい状態になります。しかし、水分が減って土壌が酸化的になると、作物に吸われやすい形態になります。

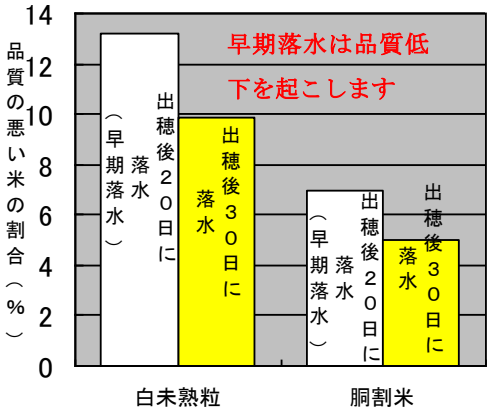
※台風や強風の接近が予想される場合は、急激に水分が奪われ病気ならびに品質低下になるおそれがあるため、深水で管理をしましょう。

②　落水期

出穂後３週間が過ぎると、間断かんがいを行います。

落水の目安は収穫の５日前頃です。早期落水は白未熟粒や茶米の発生･収量の低下につながるため避けましょう（図１）。圃場条件に応じてコンバイン作業に支障がない限り、できるだけ落水は遅らせましょう。

図１．落水時期と白未熟粒、胴割粒の関係



収　穫

お盆過ぎには「みずかがみ」が、下旬には「コシヒカリ」「キヌヒカリ」の収穫が始まります。刈り取り前には水稲の生育をよく観察し、穂に緑色を帯びた籾が１０～１５％残っている状態が刈取り適期となります。収穫時期が近づいたら圃場に入り収穫適期判定板（図２）を用いて穂を観察しましょう。（必ず圃場ごとに実施してください。）

収穫時期が早すぎると、籾水分が高いため、乾燥経費がかさむと共に青未熟粒の発生増加につながります。反対に、刈遅れは胴割粒や、品種によっては降雨にあうと穂発芽になるので、適期刈り取りに努めましょう。

図２．収穫適期判定板

※令和４年産米水稲施肥設計書の最終ページにも掲載しています。

収穫作業前に、コンバイン・乾燥機などを異物混入のないように念入りに清掃・点検してください。また、品種が変わる場合も同様に清掃を行い、コンタミ（品種が混ざること）のないようにしましょう。

大　豆

病害虫防除

莢や子実を加害するハスモンヨトウ（写真３）、フタスジヒメハムシ（写真４）、アオクサカメムシ（写真５）等の害虫や、紫斑病（写真６）は、収量の減少や品質の低下に大きく影響するので、若莢期～子実肥大期にかけて、重点的に防除を実施します。開花期に茎や葉、莢に薬剤が十分かかるように散布し、周辺作物には薬剤が飛散しないように注意しましょう。

防除薬剤については下記の表の通りです。

写真３.ハスモンヨトウ

写真４.フタスジヒメハムシ

写真５.アオクサカメムシ

写真６.紫斑病

◎病害虫防除（使用基準をしっかりと遵守し周辺作物に注意し散布しましょう）　10a当り

		薬剤名	散布量	対象病害虫	使用時期	使用回数
粉剤防除	1回目	スタークル 粉剤DL	3kg	カメムシ類・フタスジヒメハムシ・ダイズサヤタマバエ	収穫 7日前まで	2回以内
	2回目	スミチオン ベルクート 粉剤DL	3kg	カメムシ類・マメシンクイガ・紫斑病	収穫 21日前まで	4回以内
	3回目 4回目	トレボン 粉剤DL	4kg	アブラムシ類・カメムシ類・ハスモンヨトウ・フタスジヒメハムシ・シロイチモンジマダラメイガ・マメシンクイガ・ダイズサヤタマバエ	収穫 14日前まで	2回以内

		薬剤名	散布量	対象病害虫	使用時期	使用回数
液剤防除	1回目	スミチオン 乳　剤	100～300ℓ（希釈倍率1000倍）	アブラムシ類・カメムシ類・マメシンクイガ・シロイチモンジマダラメイガ・ダイズサヤタマバエ・マメヒメサヤムシガ	収穫 21日前まで	4回以内
	2回目	トップジンM 水 和 剤	100～300ℓ（希釈倍率1000倍）	紫斑病・菌核病	収穫 14日前まで	4回以内
	3回目	トレボン 乳　剤	100～300ℓ（希釈倍率1000倍）	アブラムシ類・カメムシ類・ハスモンヨトウ フタスジヒメハムシ・フキノメイガ・マメシンクイガ・シロイチモンジマダラメイガ・ダイズサヤタマバエ	収穫 14日前まで	2回以内

1ページ

◎病害虫防除（無人ヘリ･ドローン散布用）

10a当り

		薬剤名	原液	散布量	対象病害虫	使用時期	使用回数
無人ヘリ・ドローン散布対応剤	1回目	トップジンMゾル	160mℓ/10a	0.8ℓ（希釈倍率5倍）（水 640mℓ 薬剤160mℓ）	紫斑病	収穫14日前まで	4回以内
	2回目	MR. ジョーカーEW	50mℓ/10a	0.8ℓ（希釈倍率16倍）（水 750mℓ 薬剤 50mℓ）	カメムシ類･ハスモンヨトウ	収穫14日前まで	2回以内
	3回目	プレオフロアブル	50～100mℓ/10a	0.8ℓ（希釈倍率8～16倍）（水 700～750mℓ 薬剤50～100mℓ）	ハスモンヨトウ	収穫7日前まで	2回以内

※使用前には必ずラベルやチラシ等で登録内容・注意事項をよく読み正しく使用しましょう。

※茎、葉裏・莢に十分かかるよう、しっかりと散布しましょう。

※隣接する作物に飛散しないよう注意して、防除を実施しましょう。

水管理

大豆の生育初期はきわめて湿害に弱いのですが、開花期から登熟期にかけて水を多く必要とします。この時期に水不足になると着花・着莢数（ちゃくきょうすう）が著しく減少し、青立ち症状や減収に結びつきます。品質面でも、大粒比率や粒揃いが低下します。かん水は開花期～登熟初期に、土が白く乾いて、葉が裏返るなどの症状が目立つ頃に行います。大きな圃場においては、一度の入水は行なわず３日くらいに分けて入水を行なうようにしましょう。

中耕・培土

中耕・培土は大豆の安定多収栽培には、欠かすことのできない基本技術です。

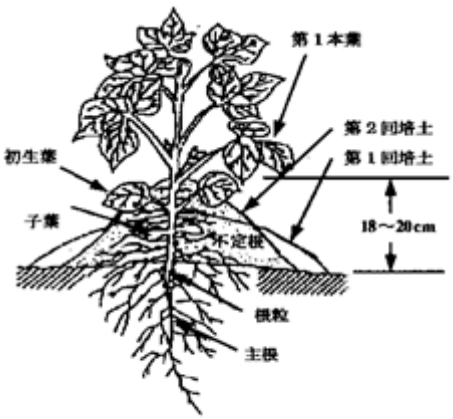
【効果】

雑草防除・倒伏軽減・排水性の向上・養分吸収の向上・根粒菌の増殖など

●１回目は、本葉２～３葉期頃に子葉が隠れる程度に行いましょう。

●２回目は本葉４葉期頃に初生葉が隠れる程度の高さ（１８～２０㎝）まで行いましょう。

作業適期が遅れると根を傷めるので、開花１週間前までには終わらせましょう。



大豆の中耕・培土